

みんなで育てる「たいしの子」 vol.23

非認知能力でつなぐ大人と子どもvol.1

非認知能力でつなぐ 子ども・家庭・地域の未来

合同号

太子町では今、子どもたちの「幸せに生きる力＝非認知能力」を町ぐるみで育む取り組みが始まっています。5月18日のフォーラムでは、太子町の実践が「町全体で進める先進的なモデル」として評価されました。子どもの育ちを学校・家庭・地域で連携した新たな取り組みが動き出しています。



■ ボーク 重子（しげこ）さん

非認知能力を軸とした子育ての重要性を日本全国に発信。非認知能力育児のパイオニアとして知られる。「『世界最高の子育て（ダイヤモンド社2018年出版）』がベストセラーとなって以来、「非認知能力」の火付け役として講演会や執筆を精力的におこなう。その後出版された本は7冊、アジア圏での出版は4冊。講演会とワークショップの参加者は12,000名を超える。「人生が変わる1分間の深イイ話」「踊る！さんま御殿！！」「ノンストップ」をはじめメディアの登場は80媒体以上（2022年1月時点）」



■ 中山 芳一（なかやま よしかず）さん

All HEROs合同会社代表社員、IPU環太平洋大学特命教授。

非認知能力の育成を中心とした教育実践・研究の第一人者として、全国の学校・保育現場と連携し、授業改善や学校再生に取り組んでいます。

著書に『教師のための「非認知能力」の育て方』

『学力テストで測れない非認知能力が子どもを伸ばす』などがあり、30冊以上の執筆・監修を担当。

2025年放送のTBS系日曜劇場『御上先生』では教育監修を務め、現場に根ざした知見が広く社会に活かされています。



■ 徳留 宏紀（とくどめ ひろき）さん

フィンランドでの教員経験を経て、さまざまな角度から豊かな生き方・在り方を考えるきっかけづくりをおこなっている。

現在は幼児教育に携わり、子どもたちの非認知能力を育むために「保護者以外の大人」が果たせる役割について多くのヒントを届けている。

① 子どもの“見えない力”を、町ぐるみで育む

5月18日（日）、太子町では「フォーラム&セミナー」を開催しました。これは、子どもたちが“自分らしく幸せに生きていく力”＝非認知能力を、学校・家庭・地域が一体となって育んでいくという町の新たな取り組み（新事業）の一環です。

非認知能力とは、自己肯定感や感情のコントロール、あきらめない力、他者と協力する力など、テストの点では測れない“見えない力”のこと。これからの時代を生き抜くために、世界中でその重要性が高まっています。

② 学校園から始まった取り組みが、町全体へ

今回のフォーラムでは、町内の教育実践が出発点となり、家庭や地域へと広がっていく「太子町型の取り組みの流れ」が、多くの来場者の共感を呼びました。

講師の中山芳一先生やボーク重子さんからは、

「非認知能力の育成を“学校発”で進め、町全体へと広がっていくとする流れが素晴らしい」

「太子町の教育現場は、非認知能力を自然に育む環境が整っている。これは特別なことではなく、これまで大切にされてきた実践の延長にある」

と、高い評価をいただきました。

さらに、太子町の特徴である**幼小中一貫教育**を活かして、0歳から中学生までの“つながる育ち”を土台に、町全体が「子どもの育ちを支える環境」へと進化していく可能性が語られました。

③ 継続がカギ。“習慣”になる取り組みへ

フォーラムでは「一回できることよりも、続けることが大切」「良い行動や声かけを習慣にすることが、子どもの力になる」といった言葉が交わされました。

非認知能力は一朝一夕では育ちません。しかし、大人たちが「やってみせる」ことで、子どもはその姿から“幸せに生きる力”を自然に学びます。

そのために、太子町では家庭でも取り組みやすいワークシートや、日々の声かけを意識できるツールも開発中です。



④ 町全体で、子どもも大人も幸せに

この取り組みは、子どものためだけではありません。

「子どもが“大人になるのも悪くない”と思える町に」

というメッセージにあるように、保護者や地域の大人自身も、非認知能力を通じて“幸せに生きる力”を育んでいけるのです。町全体がひとつのチームとなり、子どもも大人も育ちあう太子町。非認知能力をキーワードに、未来へつながるまちづくりが、いよいよ動き出しました。

⑤ セミナー 分科会2 「斜めの関係」が育む非認知能力



「斜めの関係」が育む力

徳留さんが強調するのは「斜めの関係」の大切さ。親や先生（縦）、友達（横）とは異なる、地域の人や習い事の先生、図書館スタッフなど、“近くにいるけれど立場の違う大人”との関わりが、子どもたちの心を豊かにするのです。「あんな大人になりたい」という憧れこそが、非認知能力育成のスタートになる。

「以前は中学校教員としてキャリアを重ね、退職後、太子町の非認知能力育成プロジェクトに深く関わってきました。」そう語るのは、三宅町立三宅幼稚園園長の徳留宏紀さん。フィンランドでの教育実践も経験し、現在は小さな町の園長として、地域ぐるみで子どもたちの“見えない力”を育てることに取り組んでいます。

“通わせたい”園に

「三宅町に子どもがいる限り、どんな保育をしても園には来る。だからこそ“だから通わせたい園”にしよう」と、徳留さんは語ります。その思いを実現するための柱は、「心理的安全性と同僚性」「異年齢交流」「家庭・地域との連携」。異年齢の子どもたちが日常的に関わり合うことで、思いやりや挑戦する力などが自然と育まれていきます。

子どもたちに還る循環を

「親や先生だけでなく、多様な価値観や大人と触れることが、子どもの人生を育てる。だから、町全体で子どもを支え合うしくみが必要」と語る徳留さん。太子町で始まった非認知能力の取り組みは、すでに4年目。学校園所・地域が一体となる中で、子どもたちに還元される“幸せの循環”が確かに芽吹いています。

思いやり、自己肯定感...
家庭でどう育てる？
ヒントがたくさん！
随時更新中

子どもの“見えない力”を育むヒント、公開中！

5/18に開催された「フォーラム」やボーク重子さんによるセミナーの内容を、太子町のホームページで公開しています。自己肯定感、感情のコントロール、思いやり—子どもとの関わりの中で、非認知能力をどう育てていけるか。専門家の講演や実践例、今後は動画やテキスト、音声配信も順次掲載予定です。日々の関わり方のヒントに、ぜひご覧ください。

太子町の非認知能力に関する内容はこちら

